

42 名護親方と

具志頭親方（二）

名護の親方と具志頭親方が琉球国から中国に留学にやられた時の話らしいですね。中国で、教室で授業を二人とも受けておる最中に、

「雷買わんか、雷買わんか」と言うて歩く商人がおつたらしいですね。そしたら、具志頭親方は、

「不思議だなあ。雷というものが買えるもんかなあ。どんなもんかなあ」と言うて、先生に断わつて、その雷を買わんかと言うた人に会いに行つたらしいです。そうしたら、雷というものが買えるわけがないでしょう。それで、とうとう尻づくめをして帰つてきて。先生が、

「どうだったか、具志頭親方」と聞いたところが、「いやいや、これは違います。何もありませんでしたよ」と言うて、物笑いになつたらしいですね。

幾日か過ぎて、ある日のこと、今度は虎の子、
「虎の子買わんか、虎の子買わんか」と言うて歩く者

がおつたもんだから、名護の親方は、

「ああ、虎の子。これ、中国ではおるんだなあ。一応虎の子を見るだけでも見てみよう」と言うて、先生に断わつて虎の子を見に行つて、帰つてきたら、

「虎の子というのは、沖縄では生存しませんので、どんなかなと思うて見に行きました」と言うて報告があつたらしいです。

それだけ、人間の頭の知恵が違ふんですね。

それからもう一つ、名護の親方が歌を書いて。そして、自分の机の引出に入れておいたらしいですね。そうすると、具志頭親方が、その名護の親方の机の引き出しをひいて見たところが、そこに歌を書いて置いてある。何と書いてあるかなあと思つてその歌を読んだところが、この歌が、『クバヌハルヤシガ、ムティナシヌクタサ、アチサシラマスル、タマヌウチワ』という歌を書いてあるんです。それで、

「ああこれはようできた歌だなあ、立派な歌だなあ」と言うて、今度は自分が書き直して。そして、国王に、「国王様、私、歌を詠みました。ひとつご覧になつて下さい」と言うて国王に差し上げたところが、

「これはお前が詠んだ歌ではない。本当にお前が詠んだか」ちゆたら、

「はい、私が詠みました」

「嘘を言え、こりやお前が作った歌ではない。これはお前に対しての歌だよ。わかるか」とおっしゃったらしいです。

これ、実は、具志頭親方というのは、国王の簀さんに当たるわけですよ。そうだから親しく、そうお話もなさったでしょうけれども。で、この歌の内容を申し上げますと、『クバヌハルヤシガ、ムティナシヌユタサ、アチサシラマスル、タマヌウチワ』という方言の歌ですがね。『クバヌハルヤシガ』というのは、クバの葉といって扇子を作る材料です、あれは。そんな粗末なものだけでも、『ムティナシヌユタサ』というのは、国王の簀さんだから、国王の簀さんだから、国王も自分の簀には親しくされるし。それから、簀さんだから、自分の親父だから親しくして行くのであって、本当の玉のうちになっっているんだと。

結局、具志頭親方に当てての歌だけれども、具志頭親方はそれを知らない。自分に名付けて作られた歌だ

けれども、自分はわからないで、国王に、「私が作りました」と言うて、報告しておるんですよ。それだけの名護の親方と具志頭親方の頭の相違というのがあつたらしいですね。

字照屋 上江洲由豊